

最終報告書

1.基本情報

- (1) 報告者氏名:長谷川雅美
- (2) 記録日:令和5年2月20日
- (3) 中学校を視野に入れた指導 学級経営 交流学校での授業

2.対象児の情報

- (1) 学年 小学校6年生(13歳)
- (2) 障害名 自閉スペクトラム症(2018年診断)
注意欠如多動障害(2018年診断)
WISC-IV(2018年3月)の結果をみると、FIQは平均値より高く、特にPRIでは、高い数値であった。半面、PSIは平均値より少し低かった。

(3)障害と困難の内容

① 読むことについて

- ・ 文章を読むことに苦手意識を持っている。本人によると、文章を読んでいると、次の文章を勝手に考えて文にしてしまう癖があることが原因とのことである。
- ・ 特に国語の教科書では、2ページ以上になると読みに対する集中が切れてしまう。
- ・ 物語文の心情理解には苦戦をしている。
- ・ 教科書体よりもゴシック、メイリオなどのフォントが見やすいとのことである。

② 書くことについて

- ・ 書くことに苦手意識を持っている。書いた文字を見ると、文字の構成要素は捉えられていることから、書く活動に時間がかかることや書きなれていないことが課題にある。
- ・ 授業中にノートをとることも苦手としている。そのため、ほとんどの教科でとらない。しかし、算数の授業では、自分の考えを式に表したり、説明文を書いたりする活動では書くことができる。

③ 学習全般について

- ・ 算数に自信をもっている。自分の考えを前に出で、堂々と説明することができる。
- ・ 学習方略がわかっていると、スムーズに活動し、集中して授業に参加できる。

④ 話し方や言い回しについて

- ・ 個性的で、「つまり」「たとえば」などを多用する。
- ・ 友達と直接会話することが苦手で、大人(担任や介助員)を仲介させて、会話を行う。特に、友達にどのように注意をしたらよいかについて相談をしてくることが多い。
- ・ 放送委員会では、ひな形があれば、堂々と全校放送をすることができる。

⑤ 行動全般について

- ・ 学級委員として話し合いの司会やリーダーとして、クラスのために役に立ちたいと思っている。
- ・ 修学旅行では班編成や部屋割りで、「どうせ自分は〇〇君と一緒にされる」と発言し、同じ支援学級の友達だけでない人間関係を作りたいと願っている。
- ・ 休日の過ごし方や見通しをもって勉強することなど、中学校に進学するまでに自分なりの方法で解決したいと願っている。

3.活動目的

(1)当初のねらい

- ①学級での係を経験させることで自己有用感を高めさせる。

②大人を仲介させずとも、会話を楽しめるようにさせる。

③活動の見通しをもち、自分でスケジュールを管理させる。

(2) 実施期間 4月8日から2月10日

(3) 実施者 長谷川雅美 (実施者と対象児の関係 交流学級担任)

4・活動内容

(1)対象児の事前の状況

① 学級での係を経験させることで自己有用感を高めさせる。

学級内で「どうせぼくは」という発言が聞かれることが多く聞かれる。自分に対する評価の低さからの発言であると考えられる。3月末の学校評価アンケートの項目「友達は自分のことを認めてくれますか」では、「あまりそう思わない」と答えていた。そのため、今年度は、係活動を経験することを通して、人の役に立ちたいという本児童の願いを実現させることや他者からのプラスの評価を受けることで自己有用感を高めさせていきたい。

② 大人を仲介させずとも、会話を楽しめるようにさせる。

独特の言い回しや話の展開の仕方にクラスの友達も慣れ始めてきた。取り扱い説明書作りを通して、お互いの理解も少しずつであるが進んできたように感じられる。そこで、友達同士で話し合いをする機会を意図的に設けること、毎日の係の仕事における「みんなを意識した伝え方」を経験することで、会話を楽しめるようにさせたい。

③活動の見通しをもち、自分でスケジュールを管理させる。

中学校になると、定期テストに向けて自分で計画が立てられ、実行していけるようになることが大事になってくる。そこで、単元テストや漢字テストの予定を知らせ、そこに向けてどのように勉強をしたらよいか一緒に考えることで、自分でスケジュールを管理できる方法を模索させたい。

(2)活動の具体的な内容

①学級での係を経験させることで自己有用感を高めさせる

ア・「朝の会」の進行

- ・ 学級委員として、毎朝の「朝の会」を行う。その際に DropNews を活用する。
- ・ 「朝の会」で取り組むプリントの用意など、学級委員会(全員で 4 名)で話し合いをさせることで、話し合いの方法を学ばせる。

イ・「給食のお替り」奉行

- ・ お替りの仕方のルールをもとに、毎日のお替りを取り仕切ることで、友達への声掛けやルールのあり方を経験させる。

ウ・「ありがとうカード」を書こう

- ・ 友達から認められる経験を全員にさせるために、学期末に学級全体でありがとうカードを書かせる。

②大人を仲介させずに会話を楽しめるようにさせる

ア・相手に伝わった経験させること

- ・ 学級活動では話し合いを通して合意形成させることで、自分の考えや思いを言える場を与える。また、その際は、発表の話型を学級全体に指導していく。

- ・ 自尊感情を向上させるために、算数では、周囲の友達の聴く態度も育てながら、発表する機会を多く与える。
- ・ コミュニケーションスキル向上を目指して、学級活動の時間に、それについて題材として取り上げ、実践を促す。
- ・ 4月の学級開きには、他者理解を促す題材を取り上げ、クラス全員に「自分のトリセツ」を作らせる。
- ・ 学級の一員としてお互いに認め合えるような学級風土を作る。
- ・ Chromebookを使った、話し合い活動も設定していく。

イ・活躍の場の設定

- ・ 良さや長所を生かすために、算数や総合的な学習の時間に、発表する場を意図的に設定する。
- ・ 興味のあることなどを学年の友達に知らせるために、自主学習コーナーを活用させ、発表の場を設定する。
- ・ 朝の会、給食の奉行制度を活用する。

③活動の見通しをもち、自分のスケジュールを管理させる

ア・時刻の可視化

- ・ 時間を意識させるために、ゴールまでの時刻を可視化したり、音で知らせたりするなどに、タイマーを使う。
- ・ 授業中の見通しを授業者には明示させ、活動の見通しを持つようにさせる。



(Chrome book で連絡)

イ・スケジュールの確認ができること

- ・ 1日の流れを常に確認できるようにさせるために、Chromebookを使う。また、だれでも確認できるように、廊下に学年掲示板としてChromebookでスケジュールを表示する。
- ・ 週休日や休業日においても自分でスケジュールの確認ができるように、家庭でChromebookを使い、同様の手立てをお願いする。
- ・ スケジュールが変更になった場合の確認の仕方や対応の仕方を、指導していく。

ウ・学習の見通しを持つこと

- ・ 単元ごとの身につけさせたい力とそれらの系統性をあらかじめ示し、学習の見通しを持たせる。

図工や国語での学習の停滞が、「悩みや気になること」にあげられ、それが「楽しくない」の理由になっている。停滞する状況が、本児のイライラする行動で現れるため、友達も距離を置いてしまったと感じられた。

また、2 学期末の学校評価アンケートの項目「友達は自分のことを認めてくれていますか」については、昨年同様「あまりそう思わない」と返答した。

②エピソード

ア・朝の会

朝の会では、「挨拶、今日のニュース、先生の話」の順に会を進め、その司会を行っている。今日のニュースでは「Drop News」を準備し視聴させる係も行っている。1 学期の終わりになると、自分のコメントをつけたり、友達に意見を求めるようになったりしてきた。友達も意見を求められると気軽に答えていた。2 学期から子供たちの意見で、今日のニュースを給食の時にも見ることとなったが、給食中ということもあり、会話が途絶えてしまった。

イ・給食のお替り奉行

毎日、牛乳を2本飲みたい気持ちを抑えて、クラス中に「牛乳がありますが、飲みたい人はいますか。」「じゃんけんで決めましょう。」とルールを伝え、お替りの処理を行っている。5月までは、友達が牛乳をのみたいと手を挙げると舌打ちをしたり、いやな顔をしたりしていたが、7月にはじゃんけんの結果を受け入れるようになった。クラスの、本児童が食べられない魚介類のおかずの時は、手を挙げることを遠慮し、「おなかすいちゃうだろうから、のんでいいよ」と声をかけるようになった。

2学期後半から、牛乳は本児童が必ず飲むものだとクラス中が理解し、配膳の時に「もう一本持っていけば」と声がかかることもあった。本児は、誰かに言われないと自分から「ほしい」と言い出せないところもあるため、そのように言われることはうれしかったようだ。

(2)大人を仲介させずとも、会話を楽しめるようにさせる。

①報告者の気づき

学級活動や朝の会などで、相手を意識した言い方などの学習をしたり、わからないときは聞き返してみることも学習したりしてきた。また、それらを実践できるような場面の設定も、集団の大きさにかかわらず、国語や総合的な学習、社会科で行ってきたが、型通りの発表と受け答えはできても、会話を楽しむという対話は難しいようであった。その原因の一つとして考えられるのは、人間関係づくりである。本児を取り巻く環境づくりがうまくできなかった。(1)での述べたように、学級経営の課題である。

そして、「相手意識をもって伝えよう」の学習をただけでは、当たり前ではなるが日頃の生活にはなかなか実践できないことも痛感した。

②エピソード

ア・トリセツ

4月の学級開きに「自分のトリセツ」をクラス全員に作らせた。教室に掲示することで、お互いをして付き合いに生かしてもらうことをねらいとした。「○○さんって、急に話しかけられとドキドキしちゃうのだった。先生はすぐ話しかけるから、気を付けたほうがいいよ」などと、それをもとに話が弾んだ。

2学期になり、トリセツがなくても会話が進むかと思っていたが、本人の様子を遠くから見て話しか

けるのを遠慮してしまう友達の姿がクラスの中に見られてきた。なぜそうなるのかと思い、何人かに話を聞くと、本児が足をゆすったり、体や髪を掻いたりすることが多くなり、いつ話しかけてよいかわからないとのことであった。そこで、「〇〇くん、今、暑いから、ちょっとつらい？どう？」「ハンカチ貸そうか、忘れちゃったのだね」と、イライラしているのではない状況を大人が何気なく伝えることにした。

2 学期の後半から、図工の宿題や国語の課題で、以前のような行動が多くみられ、クラス全体が本児にどう接してよいか、そして、いつ話しかけてよいか悩んでいたようだった。

イ・スマホ係

修学旅行の班長がやりたいと言い出したことに対し、一緒にの班の友達が「まずは、話を聞いてくれてトリセツに書いてあるからさ、なぜ、班長がやりたいのか、みんな聞こうぜ」と言い、班長になりたい理由をじっくり聞いていた。そうしたところ、スマホを持ちたいという願いがあることがわかり、その班では、「スマホ係」を作ることによって解決した。

ウ・図工の宿題

2学期に、「言葉からひろがる」という図工の単元があり、本児は大変苦戦していた。犬の世話をしている文章からより想像を広げることは難しく、それでいて犬の絵を模倣することも、本児には許しがたいことであったようだ。写真を検索し、それを大雑把に三角形や四角形にとらえて描くこともやろうとしなかった。それを見て、クラスの友達もどのように声をかけてよいかわからずに、単元の学習が終了した。授業担当として何度もヒントを与えて、選ばせる余地も残したつもりであったが、それももうまくいかなかった。

後日、「先生、先生に言われたように、大人に手伝って描いてもらいました」と放課後デイの先生に描いてもらった絵をもって、嬉しそうに掲示した。本人はできたことを伝えたかったのだと思うが、このことから、クラスの友達と距離ができてしまった。

エ・算数の授業

総合的な学習の時間に、スライドを使って発表会を行ったり、算数の授業ではゲストティチャーとして1時間を担当したりさせた。特に1月に行った算数の授業では、本人は満足そうな表情で授業を終えた。しかし、授業後のアンケートには、実際の友達の評価は厳しいものであった。「一人でぶつぶつ言っていて」「すまん。失敬と一人で連発していて、笑いを取ろうとしているのかな」「黒板や掲示物があるとわかりやすいし、友達の黒板の書き方には文句を言うのに」などと書かれていた。

オ・ありがとうカード

運動会、ねぷた祭などのあと「ありがとうカード」を書かせると、「一生懸命声を出して、えらいなあと思いました」というカードをもらっていた。カードで書かれたことを、本児に伝えると、嬉しそうだった。

3 学期は、「自分は褒められるとうれしいのだから、一日1つはありがとうを見つけよう、伝えよう」と学級で決め活動することにした。放課後、担任から一日の様子を聞いてもらっているが、今のところ、「ありがとうはない」が続いている。

(3)活動の見通しをもち、自分でスケジュールを管理させる。

① 報告者の気づき

時刻やスケジュールを視覚化しても、それを本児が自分から確認することはむずかしく、まだまだ大人の言葉がけや支援が必要であることがわかった。授業の様子を見ても、周りの友達が Chrome book を持っているから、教室に取りに帰るようになっていたため、3 学期からいつも携帯させることとした。また、改めて、どの子たちにも「Chrome book はノートにもなるし、調べる道具である」ことも伝えるようにした。

学習の見通しも、国語、算数、社会については、単元ごとに学習計画を作り、配布したが、単元によってはうまく進まなかった。特に、国語では、一時間に 1 枚ずつのプリントを用意し事前に渡し、予学習も併せてできるようにしたが、それが、負担となってしまったようであった。

小学校では、支援方法についていくつもの課題が残った。中学校では学校生活が円滑にいくように、保護者の支援をよりお願いしようと考えている。また、スケジュールが保護者にもわかるように、保護者の支援につながるように、中学校にも情報を毎日あげてほしいと、お願いした。

② エピソード

ア・Chrome book を使う

1学期は、単元テストはもちろんのこと、漢字テストなどについて、予定表を配布した。それをもとに毎日の学習の予定を立て、テストに備えることができた。2学期から、予定表を壁に掲示し、自分で確認させるようにしてみた。そうしたところ、「見るのを忘れた」が多くなり、予定表を配布することの効果を実感した。

また、2 学期後半から Chrome book を週に 2 回持ち帰ることになり、個人的に連絡を入れることを行った。夏休みも見ることが定着しなかったため、保護者にも協力をお願いした。しかし、なかなか見ることが定着せず、現在に至っている。3学期は、毎日 Chrome book を持ち帰っている。そこで、毎日の記録をフォームで簡単に記入できる課題を投稿した。日常生活の中に Chrome book を開けることがルーティンとなるとよいと考えているが、なかなか定着していない。

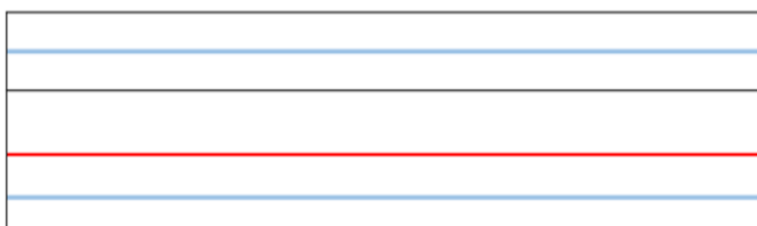
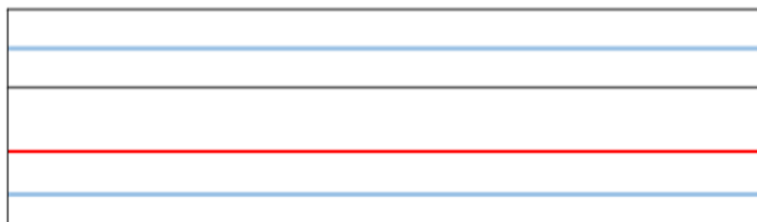
イ・英語の文字

英語の授業では「You can eat～」を発音し、友達とも言い合う中、「eat ってなんという意味だっけ」と突然聞いてきた。「今まで言っていたのに、どうしたの?」と聞いたところ、「いやー、分かんないんだよね。単語の意味は」とさらりと言ってきた。また、プリントを見ると、d と b が判別できていないことがうかがえた。単語の綴り方、意味、発音を関連付けて覚えていくことに困難があることがわかった。そこで、2学期から、提示する文字をできるだけ一筆書きにすることや、幅を変えた四線がかいてあるプリントを作るなど、形を見やすくする工夫をした。

(小文字用のプリント・幅を 4 回変えた)

3学期になりアルファベットの形は認識できるようになったが、ローマ字と英語の区別がうまくつかないことも分かった。そこで、形を覚え、バランスよく書けるように、プリントを作った。

小学校の思い出を書くユニットでは、登山を TOZAN と書いた。「TOZAN でもいいかもしれないけど、英語では CLIMING かな、クロームブックで調べてみようか」と提案したが、プリントを破き捨ててしまった。Chrome book で調べていいのだという



小文字を練習してみよう!
線は、みんなが書きやすいように勝手にくっつけました。文字の形がきれいになると見やすいね。

こと、翻訳機能の使っているのだということ、授業の最初にはっきり伝えておけばよかったと申し訳なく思った。

ウ・スライドを作る

昨年度は、社会科の授業では寝てしまうことが多く、別室で自分の学習方法に基づいて学習を進める形態であった。6年生になり、担当が変わり、教室で授業を受けている。担任としては、「よかった」と思っていたが、それぞれの単元で、Chrome book を使って分かったことをまとめる時間になると、机に伏している姿が見られるようになった。担当からも、「提出されないので、その部分にはCがつきます」と言われても、「何を書いていいかわからない」と1学期は提出することができなかった。

そこで担当と相談し、本児には「何をかいてほしいか」がわかる項目立てのあるフォームを与えてほしいとお願いした。2学期は見本のスライドを提示したところ、それを見ながらスライドをまとめることができた。

6・実践を終えて

1年間の実践を一言で表わすならば、高学年の児童の支援は難しかったということである。実践において、本児の気持ちや状態を尊重しながら、クラス全員34名も大事にしたいとなると、私自身の力が足りなかった。子供たちの発達段階、一人一人の特性や学力を考えながら、私自身の学級経営の目標である「期待登校、満足下校」を目指し、まだまだ精進しなければならないと痛感している。

そして、小学校から中学校への引継ぎをスタートとし、中学校の先生方が、本児のために適切な支援を行い、本児が通常学級で毎日楽しく学校生活を送れることを切に願っている。